



ゴジラの社会史

日本女子大学教授

成田 龍一

その頃（ジュラ紀——註）から次の時代、白亜紀にかけて、きわめて稀に生息していた海棲爬虫類から、陸上獣類に進化しようとする過程にあった中間型の生物とみて差支えないとおもいます。かりに、これを大戸島の伝説にしたがって、ゴジラ、とよぶことにします（香山滋『ゴジラ』）

ビキニ環礁近くに太古より眠る生物が水爆実験の放射能で巨大化し、日本を襲う。続編も次々に作られ、怪獣映画を世界的に流行させた

（『広辞苑』）



1. 映画「ゴジラ」シリーズと戦後日本の社会

映画「ゴジラ」（東宝）のシリーズは、1954年の第1作から、2004年の「ゴジラ Final Wars」まで、50年にわたって撮り続けられ、その数は28作に及ぶ。この間、ゴジラは、アメリカ生まれのキングコングと闘い、巨大な蛾の怪獣であるモスラと争いを繰り返す。地震などによって目覚めた、古大怪獣のアンギラスやラドン、あるいは、宇宙からきた怪獣であるキングギドラたちを倒し、さらにはメカゴジラと闘うなど、多くの観客を夢中にさせた。

28作のシリーズは、第1作（「ゴジラ」本多猪四郎・監督）、第2作（「ゴジラの逆襲」小田基義・監督、1955年）と製作されたあと、1960～70年代にひとつの山場を迎え、1962年の第3作「キングコング対ゴジラ」、1964年の第4作「モスラ対ゴジラ」（ともに、監督は、本多猪四郎）が作られた後、ほぼ毎年のように公開される。1962年から75年までに、公開されたゴジラ映画は13本に及んでいる。

以上をゴジラ映画の「前半期」とするとき、ゴジラ映画は、前作から9年の間隔をあけて作られ

た、第16作目の「ゴジラ」（橋本幸治・監督、1984年）によってあらたな段階（＝「後半期」）に入る。1989年からは、世紀転換期を含んで、再びほぼ毎年、ゴジラ映画が封切られるようになり、1989年から2004年の最終作まで、12作品が作られた。ハリウッド版のゴジラが作成されたのは、この間1998年のことであった。

ゴジラ映画がシリーズ化されていた、1954年から2004年までの50年間は、その前半は、日本が高度経済成長に向かって助走をはじめ、オイル・ショックなどを経ながら、「経済大国」と成り上がっていく時期に相当する。また後半は、バブル経済によってさらに経済が肥大化しつつ、その後、長い不況に入り込む時期となっている。日本社会が、経済の変化によって大きく変動する50年間に、ゴジラを主人公とする映画が撮り続けられていたということになる。この1950年代後半から2000年代の前半という、高度経済成長とその帰結の時期の50年間（＝半世紀）の日本社会の様相を、ゴジラ映画は映し出しており、社会史の素材として欠かすことのできない材料となっている。とくに、「前半期」の作品は、日本社会の抱える「問題」を絶えず意識させるようなつくり方がなされていた。



2. ゴジラ映画のメッセージ

「前半期」のゴジラ映画のシリーズは、ゴジラが攻撃する場所、ゴジラが闘う相手、そしてゴジラの「襲撃」の意味にたえず工夫が凝らしてある。そもそも、海底洞窟に潜んでいたゴジラが、200万年の眠りから目覚めるのは、繰り返される水爆実験の影響とされている。アメリカによる1952年11月のエニウェトク環礁の実験、とくに、1954年3月のビキニでの実験によって、おりから操業中の第5福竜丸が被爆したことが、「ゴジラ」映画の

出発——ゴジラの誕生に大きな影響を与えていることは、「ゴジラ」映画の観客には自明のことであった。また、そのことは、第1作の「ゴジラ」のなかでも、繰り返され説明されている。

こうして、「前半期」のゴジラ映画が送り続けるメッセージのひとつには、核と放射能への恐怖がある。ゴジラ自身、水爆を被爆したとされるとともに、第7作「ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘」（福田純・監督、1966年）で、ゴジラが闘うエビラは、放射能汚染によって突然変異したエビの巨大怪獣とされ、怪獣たちの眠りからの目覚めは、(ゴジラと同様に)水爆実験によるものが少なくない。

「後半期」にも、こうした認識は持続し、1984年の「ゴジラ」では、ゴジラは核物質をエネルギー源とするとされ、「井浜原発」を襲っている。また、「ゴジラ2000 ミレニアム」（大河原孝夫・監督、1999年）では、ゴジラは、茨城県東海村を襲い、原子力発電所をめぐる攻防が描かれる。

日本社会の危機意識という点では、ヘドラは代表的な怪獣であろう。公害から生まれた怪獣であるヘドラは、駿河湾から上陸し、工場地帯でゴジ

ラと闘う（第11作「ゴジラ対ヘドラ」板野義光・監督、1971年）。モスラとは、四日市工業地帯で争う。この点も、「後半期」に継続しており、ゴジラは、遺伝子工学から出現したバイオ怪獣ビオランテ（第17作「ゴジラ VS ビオランテ」大森一樹・監督、1989年）と闘うのである。

さらに、ゴジラの闘争の文脈を考えれば、あらたなメッセージも見られる。ゴジラと、ハリウッドで誕生した怪獣であるキングコングとの闘いには、日本とアメリカとの確執（あるいは、対抗）が観客たちの念頭に浮かんだであろう。おりしも、第3作「キングコング対ゴジラ」（監督は、本多）が公開されたのは、安保闘争後の1962年のことである。前作から7年を経た作品であるが、キングコングが国会議事堂に登るシーン、キングコングとゴジラが富士山のふもとで対決するシーンなど、日本——アメリカの対抗を想起させるシーンが盛り込まれている。

とともに、ゴジラは「地球と人類」の味方としての役割を果たす時期（作品）がある。とくに、

(金星の文明を滅亡させた) キングギドラという宇宙超怪獣と闘うゴジラは「地球と人類」の味方であった。第5作「三大怪獣 地球最大の決戦」(1964年)、第6作「怪獣大戦争」(監督は、ともに、本多、1965年)などでのゴジラは、1950年代の文明の破壊者とは異なった姿を見せている。



3. ゴジラの誕生と戦争の記憶

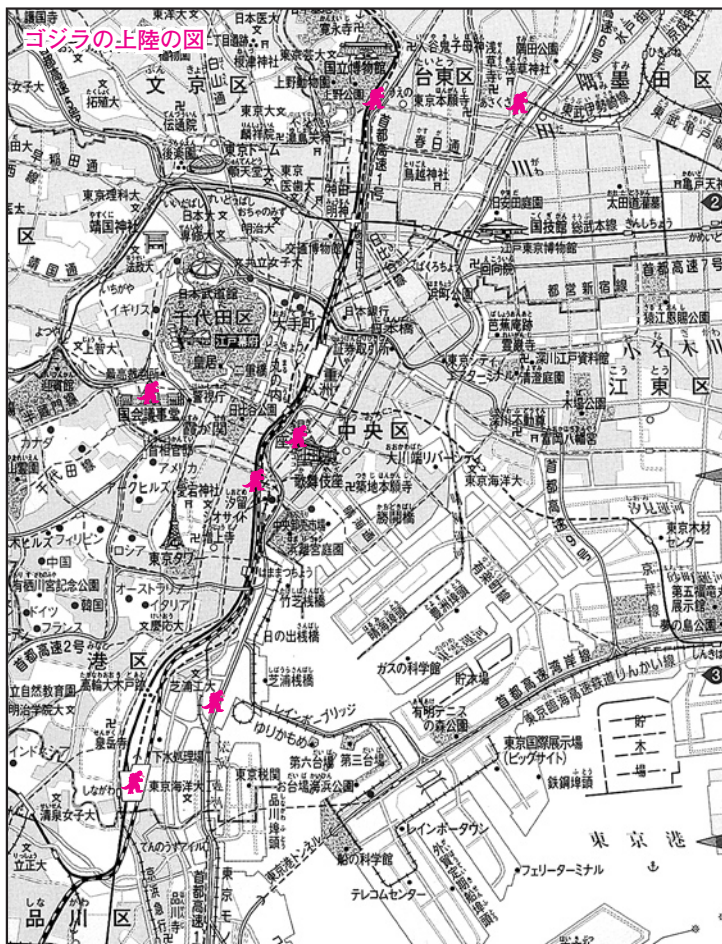
ゴジラ映画は、こうして社会的な分析が可能で、ゴジラ映画に対しての言及は多い。また、ハリウッド版のゴジラと日本版ゴジラとでは、歩き方から表情相貌まで大いに異なるなど、比較文化的な分析も可能で、2004年12月には、アメリカで、ゴジラ・シンポジウムが開催されるまでになっている。ここでは、そうした成果に学びながら、シリーズ第1作の「ゴジラ」を見てみよう。

この作品は、シリーズの最初でありゴジラの誕生が描かれているとともに、映画のできもよく、すでに多くの分析と言及がある。それらがさし示

すことは、第一に、すでに述べてきているように、水爆実験による核と放射能への恐怖が描かれていることの指摘である。「ゴジラ」の生みの親は香山滋で、原作は『ゴジラ 東京・大阪編』(島村出版、1955年)として出版された。同書の「作者のことば」で、香山は、「ゴジラは『想像上の大怪獣』であり地球上には存在しないが、『ゴジラ』に姿をかりている原・水爆は、じっさいに作られていて、いつなごとき戦争目的に使われるかしれません。そうになったら、東京、大阪どころではなく、地球全体が破滅してしまうでしょう」と言い、その「悲惨」を回避するために原水爆反対運動があり、「私も、その運動のひとつとして、小説の形式で参加したのが、この物語です」としている(引用は、ちくま文庫版『ゴジラ』による。以下、同じ)。また、第1作のポスターには、「水爆大怪獣映画」「放射能を吐く大怪獣の暴威は日本全土を恐怖のドン底に叩き込んだ！」の文字が刷り込まれている。

第二には、「ゴジラ」には、戦争の記憶が込められていることである。「ゴジラ」第1作は、敗戦から9年後の作品で、随所に戦争の記憶、とくに、空襲の記憶が濃厚であるということが指摘される。実際、冒頭の貨物船の遭難シーンは戦時を彷彿とさせ、スクリーンのなかで、ゴジラの襲撃に逃げまどう人びとは、かつてのB29の恐怖と重なっているようである。荷物を抱え、子どもの手を引き避難する様子、病院に負傷者が集められ手当てを受ける光景、あるいはゴジラが焼き尽くす街などは、空襲下の東京にダブって見える。また、1954年に自衛隊となった部隊が、輸送隊から機甲部隊、さらに戦車を繰り出し、高射砲を撃ち、サーチライトで上空を照らす光景もまた、戦時を想起させて、生々しい。

さらに、ゴジラは日本——東京を破壊してまわるが、そのルートは、A) まずは、「大戸島」という南方から現れる。「北緯24度、東経141度」という「本州の東南」に出現し、アメリカ軍が南方から「日本本土」に迫ったコースを想わせる。また、B) ゴジラは、こののち、東京湾から上陸し、東



東京を破壊するが、かなりの部分が東京大空襲と重なること（ゴジラも、空襲も）皇居を回避していることが、指摘されている。映画「ゴジラ」に襲撃のコースをたどって見れば、まずは、東京湾沖に姿を現す。品川あたりから上陸したゴジラは、芝浦から新橋を経て、銀座、数寄屋橋にいたり、ここから皇居を迂回する。そして国会議事堂へと向かい、ターンして上野、浅草を襲い（この地域の「破壊」は、映画では映されていない）、隅田川から東京湾へと赴くのである（以上の点に関し言及は多いが、『怪獣学・入門！』＜JICC、1992年＞などが、まずは参考になろう）。

だが、第三に、見逃せないのは、大衆社会状況とその移行期の人々の生活の場所や街並みが、映画のなかに折り込まれていることである。登場する古生物学者・山根恭平（「元北京大学教授」とされている）は背広姿であるが、外出から帰ると着

物に着替えている。洋室の書斎を持つが、娘や客と接するのは畳敷きの和室である。山根家ではテレビがなく、ラジオが情報手段であるが、ゴジラの行動はおりから登場しはじめたテレビで実況中継され、化学者・芹沢大助はその実況を見ている。銀座の大通りのネオンサインやビル、住宅街の大邸宅、あるいは木造家屋と路地など、改造計画が進む前の東京の街並みも、映し出される。

そして、注目すべきは、第四に1950年代半ばの時代状況の文脈が、芹沢の苦悩として描き出されていることである。破壊しつくすゴジラに対抗するためには、芹沢が開発した「オキシジェン・デストロイヤー」を使用するほかないと言われ、いったんこれを使用すれば「世界中のおえらがたが黙って見ているはずがない」と苦悶する。

かならずこれにとびつき、人類を破壊の淵に追込むおどかしの武器として、使用するにきまっている。原爆たい原爆、水爆たい水爆、その上にさらにこの新しい恐怖の武器を人類の上に加えることは、化学者として、いや、一個の人間として許すわけにいかない。・・・そうだろう？
香山滋『ゴジラ』

芹沢の苦衷は、1950年代の冷戦下での「脅威」に、どのように「平和」を掲げながら対抗するかという日本社会の苦悩にほかならない。ゴジラの恐怖を芹沢の自己犠牲と「オキシジェン・デストロイヤー」によって「解決」したものの、映画「ゴジラ」の幕切れは重苦しい。実況のアナウンサーは「感激」を伝え、巡視艇は「祝砲」をうつが、関係者は悲哀を隠していない。1950年代半ばの平和と非武装をめぐる論点も、映画「ゴジラ」には描かれている。